

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	我慢も辛抱も、要は続くことである : 持続としての忍耐論
Auther(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 23 : 1 - 16
Issue Date	2019-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/47371">10.15027/47371</a>
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047371">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047371</a>
Right	
Relation	



# 我慢も辛抱も、要は続くことである

## －持続としての忍耐論－

近 藤 良 樹

(広島大学名誉教授)

### 1. 忍耐は、時間を食べて大きくなる

忍耐は、その対象を苦痛にもつ。かりにそこに苦痛がないなら、忍耐するものは何もないのである。かつ、その苦痛が瞬時に終ったり、苦痛からすぐ手を引いたのでは、忍耐は、成り立たない。苦痛甘受の忍耐は、持続があってはじめて可能となる。

**(快と違い、苦痛は持続し、したがって忍耐も持続する)** 快苦のうち、快は、受け入れたいし持続させたいが、生促進のなった褒美で、たくさんは貰えない。苦痛は、その反対で、受け入れたくないし持続させたくもないが、障害・損傷によるもので、その除去や回復になるまで注意を向け続けるようにと、長く持続する。

損傷を与える針が皮膚にささると苦痛となり、自然的には、瞬時にこれを回避し損傷と苦痛の継続を避ける。だが忍耐は、苦痛から逃げず損傷を受け入れる。皮膚の損傷が大きくなり苦痛は続くことになる。どれだけしっかり忍耐したのかは、どれだけマイナスの事態（損傷や苦痛）を受け入れたのかで計られる。ひとつは、苦痛の質とそれへの対応の仕方で、もうひとつは、それをどれくらいという量、つまり、どれだけ長く苦痛を受け入れたのかという時間持続をもって計られる。その苦痛から逃げず傷つく時間持続の分だけ、忍耐したことになる。

**（忍耐に時間持続は本質的だが、正義、勇気、節制ではどうか）** 忍耐では、「二分我慢した」と時間的持続をもっていう。瞬時に終わる苦痛には、忍耐する余地はない。時間経過、持続をもっての忍耐である。だが、正義や勇気は、瞬時でも成り立つ。銃撃への瞬時の対応にも正義がなり勇気になる。これらでは、忍耐とちがって、時間は、どうしてもよいことである。節制の場合は、自制が中心になるから、忍耐とかなり重なる。「もう何ヶ月も節制している」と時間経過をいう。もつとも、節制は、その根本は、続けたい快を短く少なく節するのであり、続けたくない苦を長く持続させる忍耐とは、真反対になる。

忍耐では、はじめはその苦痛の質とそれへの対応の仕方が問題になるが、一旦はじめたら、多くの場合、同じ苦痛回避の衝動を、同じように抑止し続けるのであり、苦痛への構えは同一に留まるから、これへの工夫に留意する必要などなくなる（息を止める忍耐なら、口を閉じて呼吸関連の筋肉を動かさない同じ状態を維持するだけである）。あとは、それをどれだけ持続させられるかの問題となる。その同じ苦痛と同じ対応は、時間とともに、だんだんと耐えがたくなってくる。忍耐放棄にならないためには、同じ状態を中断せず持続させることであり、その時間持続に忍耐は集中する。苦痛回避衝動を抑止し損傷・苦痛の蓄積をうけとめ続けて、「何分耐えた」ということになる。

正義や勇気では、一瞬の対応（銃撃への英雄的対応）と何時間にもわたる対応（銃撃戦）とどちらが優っているかは、その対応の仕方しだいであり、時間の長さは無視してよい。だが、忍耐では、多くの場合、苦痛への対応は同一のままに、その苦痛・損傷の蓄積が（息を止め続ける我慢がそうであるように）時間とともに大きくなり、耐えうる限度となり、最後、忍耐の放棄をもたらす。苦痛と損傷の回避衝動を抑止し続けて一秒でも長くということが、時間が忍耐の肝要事となる。時間を食べた分だけ忍耐は大きくなる。

**（無為の忍耐は、時間的持続で成り立つ）** 忍耐は、苦痛の受け入れに抵抗せず、

外面的には、無為に徹底する。息を止めて忍耐する者は、そのことで生じる苦痛をそのままにして（回避衝動を抑止して）無為を貫く。「四十秒間、じっとしていた」「一分しても動じず無為だった」と忍耐は続く。二場面とも同じく無為で、違いは、時間経過のみである。後の無為が先の無為に誇れるのは、時間の持続の大きさのみである。「なにもしなかった」（苦痛を前に自ずと生じる同じ逃走や排撃の衝動を、ずっと同じく抑止して動かさなかった）ことが成果なのであり、その無為は、時間とともに大きな実りを得ることになる。時間を食べ続けて、忍耐は、大きくなる。

忍耐での苦痛への無為持続の裏では、生の損傷がそれに比例して一刻一刻増大していく。その苦痛への無為が持続できなくなり、回避衝動が表に出てしまった時点で、忍耐の放棄となる。忍耐は、（苦痛の）時間を食べられなくなったら、死ぬ。目的を目指す手段としての苦痛の忍耐の場合は、持続の放棄は、単に死ぬのではない。犬死になる。さかのぼって、すべてが徒労と化す。

## 2. 忍耐を示す言葉も、苦痛（の甘受）と持続を語る

（perseverance（辛抱・堅忍）は、「持続」を語る忍耐）忍耐についてのアウグスティヌスの作品に「perseverantia（堅忍）」と「patientia（我慢）」を各々主題にしたものがある（cf. Augustinus, A.; *De Dono Perseverantiae*, *De Patientia*.）。トマス・アクィナスの『神学大全』の忍耐論も、この二つの忍耐をあげる。perseverantia（辛抱、堅忍）は、per(=through) + severus(=severe)であり、通過＋厳しいということで、貫徹することである。この言葉は、忍耐の意味のほか、持続とか堅持とかの意味になるようで、持続としての忍耐を語るものになる。この持続をもってなる忍耐、ラテン語の perseverantia は、現代でも perseverance(英仏), perseveranza(伊)に受け継がれている。

ドイツ語では、忍耐というと Ausdauer とか Beharrlichkeit があげられるが、

これも持続を意味する。前者は、aus(=out)と dauer(=duration)からなり、外へと持続していくことで、後者、beharren は、固執する、押し通す、変えないと言った意味で、変わらず通していくことである。いずれも、持続において忍耐を語る言葉になろう。

**(patience (我慢) は、苦痛を語る忍耐)** もうひとつの忍耐の代表の patientia (我慢) は、patior (=suffer)により、受苦受難ということで苦痛の忍耐を語る。現代でも、patience (英仏)、pazienza(伊)が使われている。patience は、受動、被る、苦しむことであり、患者(patient)、受難(passion)に連なる。忍耐は苦痛の甘受であり、苦痛をあえて受け入れて、受難、苦難を耐える。ドイツ語では、patience に対しては、Geduld という忍耐の語があげられるであろうか。dulden は、忍ぶ、受け入れるということで patience のように受け身で受苦というようなことになる。

忍耐の核心には、苦痛から逃げず甘受することがあり、かつそれを持続させることがある。前者を patientia や Geduld が語り、他方の持続性としての忍耐を perseverantia や Ausdauer が語ると言うことができるであろう。

**(日本語の場合、辛抱は、苦痛を語る。我慢もその可能性が大きい)** 翻って日本語での忍耐は、まずは「我慢」と「辛抱」があがるであろう。辛抱は、辛いことを抱くということであり、持続ではなく、辛苦・苦痛(の甘受)を語る。我慢の方は、その語の成り立ちがはっきりしない。もとは、「我」儘で傲「慢」ということである。が、いまは、逆で、そういう我まな者からの難題・苦痛を忍耐する意味になっている。忍耐は、「相手の我慢(我ま)が対象だ、嫌な我慢(の甘受)だ……、我慢(忍耐)だ」となったのか、自分の我ま(我慢)に忍耐するとき、「また我慢を出してしまった。我慢を抑えねば、我慢(忍耐)だ」となったのであろうか。あるいは、強情な者、つまり我慢をもった者が、強情＝我慢を張っているのを、そういう善からぬ忍耐を、「我慢(強情)なこと

だ」と言いだしたのかも知れない。我慢＝強情説なら、「いつまでも頑なに」と持続の忍耐が言えるであろう。が、そうでなければ、我ままへの苦痛を耐えることとして、我慢も苦痛を語ることになるだろう。

**（忍ぶ、耐えるは、無理すれば、持続と解せなくもない）**「忍耐」という漢字自体は、苦痛系とも持続系ともいいがたいが、その忍と耐の訓読み、つまり「忍ぶ」と「耐える」は、牽強付会だが、持続を語ると見なせなくもない。「しのぶ」は、為（し）て延ばすこと、「為（し）延ぶ」と解せる。苦痛から逃げようとする衝動の抑制を為延ばし続ける持続の忍耐である。

「たえる」忍耐は、重いものを引き受け、つぶれず、「たち（立）」つづけ、激痛に逃げ出したくなる衝動を抑え「たち（絶）」つづける。この「たつ」では、たえだえになりつつ時間的持続を想い、「時間のた（経）つ」ことが耐えることだと連想するようなことがあるかも知れない。苦痛にじっと「経」える忍耐である。

### 3. トマスにみる持続としての忍耐論

トマス・アキナス『神学大全』は、(アウグスティヌスをふまえ敷衍しつつ、) *patientia* と *perseverantia* の二つの忍耐を論じる。前者は悪(*malum*)に耐えること、後者は善(*bonum*)への長期的持続の忍耐になると捉えている。この二つの忍耐は、世俗にひきつけて日本語でいえば、「我慢」と「辛抱」に相当する。今の不幸(=悪)への我慢、はるかな幸福(=善)への辛抱である。

**（トマスの *patientia*）**さて、トマスは、*patientia*（我慢）を、悪を「引き受けること(*sustinentia*)」(Aquinas, Thomas; *Summa Theologiae*. II-II.Qu.136. a.4 ad 1)、「持ちこたえる(*tolero*)」(II-II.Qu.136. a.3 ad 1)ことだと言う。*patientia* は、損傷・苦痛等の悪しき物事を対象にして、これを引き受け背負い忍び耐えるのである。忍び耐えるのは、本心ではいやな受け入れたくない苦痛

（悪）を受け入れることだから、トマスは我慢を、悪をあえて受け入れて「甘受する(patior)」ものともいう(II-II.Qu.136. a.3 co.)。もちろん、甘受するからといっても、悪に敗北し、苦痛とか悲痛に負けるわけではない。甘受しつつ、そういうことに「屈服する(succumbo)」ことのないのが我慢の特性となる(II-II.Qu.136. a.1 co.)とも語る。

我慢は、世俗では悪事においてもいうが、トマスは、その我慢を善の世界に限定しようとしている。つまり、「理性」に即して「善」のために、「悪を持ちこたえる (tolero)」のが真の我慢だという(II-II.Qu.136. a.3 ad 1)。アウグスティヌスは、我慢を「真の我慢(patientia vera)」と、「偽の我慢(patientia falsa)」とに分ける(Augustinus, A.: *De Patientia*. 12,14)。前者はキリスト教のもとの我慢で、後者は、世俗（情欲のため）の我慢を指す。トマスも、これを踏襲し、悪（情欲など）のための（悪への）我慢は、真に我慢と称するには難があると見たのである。

（トマスの perseverantia）忍耐は、我慢(patientia)に対照的な辛抱(perseverantia)という忍耐を他方にもつ。受難・苦難に直接しその悪に耐えるのが我慢だが、辛抱は、能動的意志的で、善(価値)を前面に据え、この善をその営為の目的・終結点と見定めた忍耐である。善を掲げ続け、それを妨げる種々の悪しきものを我慢し乗り越えて、辛抱は、どこまでもその意志を貫き通して、はるかな善を実現していく。そこでは、長期的展望に立ち持続することが必要となる。トマスは、perseverantia（辛抱・堅忍）を「長く (diu)、最後 (finis) まで、善に固執する(persisto)」ことだという(II-II.Qu.137. a.1 ad 3)。

トマスはアウグスティヌスの忍耐論を踏まえているが、後者は、キリスト教信仰を堅く守り通す忍耐として perseverantia（堅忍）をあげる。この堅忍は、仮にこれを途中でやめるようなことがあった場合は、その間どんなに長く保っていたのだとしても、それ自体がなかったことになるかと解されている。節制や勇

気は、一時それを守ったら、その間は、節制した、勇気をもったのだが、堅忍は、死ぬまで堅く守り通すのでないと、無に帰すという。確かに、不犯のような忍耐は、時々犯して、また不犯に戻るというのでは、不犯ではなかろう。生涯貫いてはじめて不犯と言いうことである。堅忍の成立は、終わりまで守ってで、終わりまでとは、「人生(vita)」自体を終えるときまでだとアウグスティヌスという(cf. Augustinus; *De Dono Perseverantiae*. 1)。トマスは、辛抱について、そういう、人生の最期まで貫いていくべきものとともに、ひとつの営為の終わり・完了までの、つまりは普通にいう辛抱も含めて論じている(cf. II-II.Qu.137. a.1 ad 2)。慈愛を貫くという場合、一生終わらない辛抱(堅忍)になることであろうが、同時に、一つの営為としては終わりを見出す。難儀な山越えなしで済むようにとトンネルを掘る長期にわたる献身の辛抱は、その開通で終わる慈愛の活動であろう。いずれにしても、どんな辛抱(堅忍)であれ、目的成就の最後までそれを貫くこと、「終わり (finis)まで善行を持続させること(continuitas)」(II-II.Qu.128.ad 5)が肝要だと説いている。

辛抱は、その長い持続において、次々生じる苦痛にその断念を思い、横道にそれることの誘惑に出会えば中断を思うことにもなる。それらを退けてどこまでもひたすらに進むのが辛抱である。善を「捨て去る(recedo)」ことがないようにと、途中で諦めないようにと耐え続けるのである(II-II.Qu.138. a.1 co.)。それは、しかし無際限にではない。その目的とする善の達成をもって終わりとなる忍耐である。そこまでを目指して、生じる困難にひたすらに耐え続けるのである。辛抱(perseverantia)では、「時間(tempus)の永続(diuturnitas)」が注目されることで、「困難なことに長く(diu)とどまり続ける(insisto)ことは、特殊な困難をもつ」が(II-II.Qu.137. a.1 co.)、とにかく、その時間的な持続の困難を忍び耐えて善を実現するのが辛抱だとトマスは論じる。



#### 4. セネカの世俗のストイックな忍耐論

(キケロの *patientia* と *perseverantia*) カエサルと同時代人でローマ共和政末期に活躍したキケロは、忍耐を高く評価しているが、その叙述に、我慢と辛抱を並べて取り上げている箇所がある。そこでは、持続を重視して、つぎのよう  
にいう。「我慢(*patientia*)は、名誉や利益のための、困難で辛苦の物事への、自  
発的で持続的な(*diuturnus*)忍耐(*perpessio*)である」といい、つづけて、「辛抱  
(*perseverantia*)は、熟考された計画のうちでの、確固たる永続的な(*perpetuus*)  
持ち堪え (*permansio*)である」と言い表している(Cicero, M. T.; *De Inventione*.  
II 163)。忍耐は、我慢・辛抱を問わず、持続がその特性になると見ていて、我  
慢の方は、困難に対決して「持続的」といい、辛抱は、しっかりした計画、理  
のもとで「永続的」不変的に持ち堪えるものと言う。辛抱は、深慮遠謀の理性  
的計画のもと永々と不変不屈に続けられる忍耐である。が、我慢も、キケロの  
特徴づけるように、持続なしでは成り立たない。瞬時に終わる苦痛では我慢す  
る間もない。短期の我慢も、逃げず耐え続けて成り立つことである。

さらにキケロは、卓越した生き方を論じるとき、忍耐を重視して、あるべき  
生き方の根本は、苦痛や苦悩から逃げずどこまでもこれに立ち向かう我慢  
(*patientia*)の堅持にあると、いわゆるスパルタ教育などをあげ、どんな苦痛も、  
その気になれば、ひとに我慢できないものはないと読者を鼓舞している(cf.  
Cicero; *Tusculanae Disputationes*.)。

(ストア派のセネカの忍耐論) 禁欲主義のストア学派では、感性(パトス)を  
抑制・否定した不動のこころ(アパテイア)を理想にする。当然、忍耐は、高  
く評価された。そのストア派でポピュラーなのはセネカであろう。彼は、キケ  
ロの一世紀あとのイエスと同時代人で、皇帝ネロの師であったが、後年、彼か  
ら死を命じられて自決した。このセネカは、感性超克の理性に生きことを求  
め、忍耐を高く評価する。安逸な生き方を唾棄して、艱難辛苦に厳しく生きる

リゴリズムを説き、受苦受難に耐えることで強靱な存在へと鍛えられるのだから、困難は買ってでも引き受けるべきだと論じる。あるいは、受難は当人が卓越した人物であることを実証するチャンスになる等と説き、耐えることの尊さを語り、試練に挑戦する我慢(patientia)を高く評価している(cf. Seneca, L. A.; *De Providentia*.)。

(セネカの patientia) ストア派では、不動のこころ、アパテイアをモットーにした。パトス(情動)超克のアパテイアのためには、激情を抑止し苦痛に耐える patientia(我慢)は必須であった。セネカの『怒りについて(De Ira)』は、怒りを根本的に悪・反価値とみなし、怒りを全面的に抑止されるべきものと捉えるが、この激するパトスの代表の怒りは、何より「自制できず(intemperans)我慢できないこと(impatiens)」によるといい、その反対、つまり自制と我慢(patients)を求めた(Seneca; *De Ira*.II 25)。怒りをもって無用の災いを惹起するのを避けて、穏やかに過ごすには、とにもかくにも「我慢する(patior)」がいるという(ibid. III 16)。そういった我慢・自制を堅持してパトス(情動)を鎮めるなら、不動のこころ、アパテイアがなり、ひとに備わった理性のリードのもとで卓越した穏やかな生を営むことが可能になると、セネカはストア(禁欲主義)的生をすすめている(なお、ギリシャ語のアパテイアは、ラテン語に直訳すると impatientia になるが、これはラテン語では逆の意味(patientia(我慢)の in(否定)という意味。先の『怒りについて』の引用の impatiens は、我慢できないことを意味していた)に解されるかも知れず、impatientia と訳すわけにはいかないとセネカはいう。patientia は、パトス(情動)だが、逆に、それを抑止する忍耐の意味になっているということである。日本語の「我慢」の意味の逆転と似た事情にあったようである(cf. Seneca; *Ad Lucilium Epistulae Morales*. 9-2))。

(セネカでは perseverantia は影が薄い) ストア派での幸福な人生は、パトス

を鎮め徳にしたがって理性的に生きることにある。パトス抑止のアパテイアの実現には *patientia* (我慢) は必須であるが、その我慢をふまえ理性的に善に生きて現に幸福なら、かなたの至福を目指して現世の苦難を忍ぶアウグスティヌスのような堅忍は問題にならない。セネカでは、*perseverantia* の語は、*patientia* と比べて使用頻度が低い。しかも、それは、「長く変わらず続ける」といった意味の日常用語にとどまり、ごく一部を除いては忍耐論の概念として特別視されるものとはなっていないように見受けられる (“Perseus Digital Library” で、その検索にかかるものを見た限りでは、そうであった)。

『幸福な人生について(*De Vita Beata*)』で、セネカは、困難に挑戦する徳目として「我慢(*patientia*)」「勇氣(*fortitudo*)」の次に「辛抱(*perseverantia*)」を挙げているから(Seneca; *De Vita Beata*. 25-6)、辛抱も形式的には大切なものとしていたのではあろう(*perseverantia* の概念内容は、セネカに先立つキケロのものから、のちのトマスのもので、*per*(=through)+ *severus*(=severe)で、通過+厳しいで、持続・不変・不屈ということで似たものであったろうし、*patientia* と並び立つものということでも、(現にセネカもそうしていることで)変わらないものであったろう)。しかし、我慢が日々の苦難に対するものとしてしばしば言及されるのに比しては、辛抱(堅忍)の方は、影が薄い。セネカの場合は、あの世の至福のための堅忍は無用で、感性を厳しく抑制したアパテイアのもと、現に理性的に生きることによって幸福を見ていた。苦痛・情動に対決する我慢の方に重きを置いた忍耐論をとっていたと解して良いであろう(歴史の順序からすれば、アウグスティヌスたちが、世俗のストア派的忍耐とはちがったキリスト教的な忍耐「堅忍」を(キケロやセネカが現世内の「永続」・不変・不屈にとどめたその「辛抱」を超越し、あの世の至福へと貫く直線的時間意識をもって) 際立たせたというべきであろう)。

## 5. 我慢と辛抱

perseverance と patience は、前者が長期の持続的忍耐になり、後者は、（もちろん持続するが）何より苦痛甘受を語る忍耐になる。これは、現代日本の忍耐の用語でいえば「辛抱」と「我慢」になろう。長く続く点滴だと「しばらく辛抱して」というが、持続よりも痛みが気がかりの注射の場合は「チクッとしますから我慢を」という。あるいは、トマスらの perseverance は善を目的とした営為で、patience は悪の受け止めに前面に出すが、この点でも、われわれの辛抱と我慢に一致する。かなたの幸い（＝善）のためにと辛抱するのであり、災い・受難（＝悪）を我慢するのである。

**（辛抱とそれを支える我慢）** ひととは目的論的に日々を営む。目的を実現するために手段として苦痛を媒介にする必要がしばしば生じるが、ひととは苦痛を回避せず甘受し忍耐することで目的まで突き進む。この苦痛を介しての目的実現を掲げた忍耐が辛抱の単純型・典型になろう。かつ、そこでの肝心の苦痛との対決を特別に意識して取り上げれば、我慢となる。善・目的への長期にわたる辛抱と、それを実現するに不可欠の悪・苦痛との対決の短期の我慢である。

長い営為の過程には種々の快苦が出てくるであろうが、これを目的実現へと方向づけ塩梅していくのが辛抱である。その途中の一つ一つの苦痛への対応は、その忍耐は、我慢ということになる。ときには、快楽が横道にと誘惑することもあるが、辛抱では、そういう快も節制し自制する（快享受の自制で生じる苦痛に焦点を合わせたら、これも我慢であろう）。その我慢や自制が全体のなかでどう位置づけられるか、それをどの程度引き受けるといいのか等を遠大な目的に照らして先に進めるのが辛抱ということになろうか。辛抱の意志は、苦痛を乗り越えていくのみでなく、苦痛を作り出していくのでもある。必要な新規の苦痛・犠牲を見つけこれに挑戦していく。苦痛（悪）への対決の我慢がへこたれそうになるとき、目的（善）への意識をしっかりとった遠大な辛抱は、そ

の苦痛への我慢の意義を説き、我慢を支え忍耐を先へと導いていく。ひとは、多くの目的論的営為を平行させ、重ねて描く。深慮遠謀をもって動く。その長い複雑な過程・営為を最後まで貫くことは、並大抵のことではなく、その辛苦につぶれそうにもなる。その辛苦を抱きとめ支えるのが辛抱である。

**（同じ忍耐の裏表としての我慢と辛抱）**辛抱と我慢は、長期と短期というより一つの忍耐の裏表になることもしばしばである。我慢も、善や目的を描くなら辛抱となる。電車の中での喫煙の我慢は、即禁煙（善）の辛抱である。我慢と辛抱は、同じ忍耐について、苦痛対決なら（主として受動的な）我慢で、善とか目的を描いてのものなら、（主として能動的な）辛抱となる。辛抱の善や目的は未来にあるとは限らない。現在とるべき規範は、現在の善である。求められている礼儀作法（善）を守るのは、面倒だが社交上しかたないと受け止めての辛抱であり、それが苦痛で耐えがたいという意識なら我慢である。

**（我慢が辛抱を内在させていることもある）**何かに我慢するとき、それが高い価値・目的のための、そういう辛抱のための不可避の我慢だということを意識しておれば、我慢は辛抱をうちにもつのである。さらに、我慢が限度ぎりぎりになるようなときには、最後、「もうちょっとだけの辛抱だ！」と辛抱が我慢のうちに顔を出す。我慢は無際限的だが辛抱は目的実現で終結するから、最後のところで、「あと、十秒の辛抱だ」と、ぎりぎりの目的を立てて最後の気力をふりしぼり、我慢は、その時間を使い切る（我慢の最後は、泣きたくなるような「辛い」状態になるから、「辛抱」となるのもあろう）。

忍耐は、苦痛甘受と持続をもって成り立っている。我慢は、苦痛対決を前面に出しての忍耐で、辛抱は、時間的持続を重視した忍耐である。我慢の最後に辛抱が出てくるのも、忍耐の時間持続面を想起させるものであろう。苦痛の我慢が忍耐放棄しそうになるぎりぎりのところで、「もう三分辛抱すれば、忍耐完了だ」、持続あつての、続けてこそその忍耐だと、戒め励ましているのである。

## 6. 忍耐は、時間持続のもとに、実りを待ち続ける

（忍耐は無為で、持続が忍耐を顕在化する）自然的にはひと苦痛は回避しようと動く。忍耐は、それを抑止して、苦痛に抵抗せず、何もしないようにする。何もしないことで成っていくのは、時間の経過のみである。忍耐は、その時間持続のなかで苦痛への無為の外面を維持し続ける。その無為持続のもとに内的に苦痛・損傷の蓄積を続けて、それが限界となり逃走衝動などが顕在化し無為をやぶると、忍耐ができなくなったということになる。

忍耐は、苦痛の持続に応じて、持続して耐え、その時間持続のもとで、実ってくる。喫煙しないでその苦痛を甘受してじっとしている無為の忍耐は、時間において実現される。「もう、三十時間も、我慢した」と時間の経過をもって忍耐を語る。喫煙衝動を抑止し続けての、苦痛の時間を乗り越えていく（外的には無為で、内的には苦闘の）持続に、忍耐は成立する。

（冷酷な審判としての、遅々として進まない時間）時間は、空間に比して、主観的なものと解されることが多いが、忍耐の時間は、主観のうちに感じられるよりは、主観から独立した客観の持続として捉えられるのではないか。自分ではどうすることもできない時間である。苦痛を耐える者にとっては、遅々として進まない、だが、決してとどまることのない、主観から独立した実在世界の根本形式をなす、継起の秩序としての時間の持続である。

時間は、忍耐にとって、厳格で公平な審判となる。苦痛の方は、主観内の事柄なので、自身でなんとかできる。忍耐しがたくなったときには、この苦痛を小さくしようとする。苦痛は、各人で異なって比較も容易ではない。だが、時間の方は（時の流れに感じる遅速は人ごとにちがうとしても）、万人に一秒は一秒で、だれもこれを変えることはできない。忍耐する者を超越してそとにある。尿意が切迫的になったとき、時間の動きをなんとかしようとする者はいない。時間は、ひとを超越した厳正な審判で、変更など不可能と心得ている。

なんとかしようと意志が働きかけるのは、苦痛の方だけである。

**（辛抱は、待つ。我慢も、待つ）** 忍耐では、外面的には何もしない。苦痛に対して無為に留まり続けて、事柄が自身の思うようなものと変わるのを、ひたすらに待つ。我慢は、苦痛の持続のなかで、その苦痛の過ぎ去るのを、現在の苦痛の無化を、待ち続ける。辛抱は、手段としての苦痛甘受をしつづけ、未来に希望を託して、目的実現のときを、首を長くして待ち続ける。我慢は無を待ち、辛抱は、有を待つ。

我慢の時間においては、苦痛の現在が持続する。厳しく有りつづける苦痛の現在は、無際限的に続く悪夢である。その悪夢が終わる安楽の無の時を待ち焦がれつつ時間に耐える。これに対して辛抱は、目的という終点を持っていて、苦痛甘受の踏み台を積み重ねながらこれへと近づいていく。現在の苦痛に負けることなく耐え続ければ、諦めることなく待つておれば、未来の善・目的が近づき将来されると、辛抱を続ける。

苦痛への無為の忍耐は、時間の経過のなかで事の熟するのを待つ。苦痛の消滅、目的成就の時までを待てれば、忍耐は、熟し、成果を得てめでたく終りとなる。だが、外面での持続する無為は、内的に苦痛回避衝動を抑止しつづけて可能になっているのであり、その衝動が勝つことになると、無為はやぶられる。待つことができなくなった忍耐は、時熟し成熟する前に、未熟のままに落果して、我慢も辛抱も成果なしに終わってしまう。忍耐が冷厳な時間（持続）のもとにあるとしみじみ思い知らされることとなる。

**（辛抱・堅忍は、どこまでが忍耐なのであろうか）** 忍耐は持続をもってなるが、その持続で群を抜いているのは、宗教でいう堅忍になろう。宗教者は、しばしば、世俗を離れ、清浄の生を守り、信仰、不犯などの堅忍を貫こうとする。だが、それが忍耐であるかどうかは問題かも知れない。聖域に生活する者には、挑発がないなら、不犯など忍耐のいることではなくなる（性欲は、個体の生に

は無用で、刑務所など挑発がないところでは、食欲と違って消失する)。アウグスティヌスは、堅忍は死ぬ間際まで守ってというが、真に堅忍を貫いて生きる者は、不犯の堅忍などは早々に成就して忍耐無用にされていて、死ぬ間際まで忍耐がいるのは、こっそり堅忍を破り続けていた者だけとなろう。

辛抱（堅忍）は、世俗の場合も、しばしば長期にわたる忍耐となる。それは、はるかな目的を目指して深慮遠謀をもって展開され、その過程は、喜怒哀楽の絡み合った複雑なものになる。辛抱では、純粹の忍耐、つまり、苦痛の甘受は、そのごく一部分に留まる。セネカらのストア主義でのように、厳しい我慢を堅持して理性に生きることが幸福という者には、いわゆる堅忍とか辛抱は、忍耐というのも恥ずかしいぐらいとなる。我慢は、端的に苦痛甘受の忍耐である。だが、辛抱（堅忍）は、我慢の忍耐を含むけれども、おそらく圧倒的には、苦痛ではない諸営為の積み重ねであり、その長い持続の大部分は忍耐の枠外にはみ出す。

我慢の方からいうと、堅忍などどこが忍耐だと言いたくなろうし、辛抱（堅忍）からいうと、人の営為は深慮遠謀の複雑多岐な展開となるもので、忍耐を苦痛甘受（我慢）にと単純化するのは浅薄だと言いたくなろう。辛抱（堅忍）は長期的持続の忍耐と言われるだけでは、辛抱にも我慢にも、我慢ならないものになりそうである。



## **Patience and perseverance require continuation: Endurance as continuity**

Yoshiki KONDO

Emeritus professor, Hiroshima University

Endurance requires continuity. If a person immediately (suddenly) abandons the acceptance of pain, the inability of their endurance is exposed. Justice and courage can exist within a single moment (for example, taking action against an armed individual). In contrast, endurance involves the confronting of continuing pain over time, which a person might naturally wish to avoid as quickly as possible. To accept pain for 1 minute corresponds directly to 1 minute of endurance. Endurance grows as the duration of pain increases. Among various conceptions of endurance, Thomas Aquinas focused on perseverance as a typical form of endurance constructed by continuity. Aquinas proposed that perseverance refers to the pursuit of good until the end, with long endurance, whereas patience targets evil and tolerates it. Perseverance and patience are typically treated as distinct concepts. In Japanese, the terms “shinbou” (perseverance) and “gaman” (patience) are typically used in a contrasting way. Perseverance typically involves aiming for good/purpose, requiring a long duration of hard work as a means to achieve this purpose. In contrast, patience confronts and accepts injury or pain, and often lasts for a short time. However, in some situations, the two become aspects of the same episode of endurance. If a person endures for moral reasons or because of a norm (for example, etiquette) which they must obey at that time, it is considered perseverance. However, if their main concern is concentrating on the pain, it is considered patience.